

# 古代の「サト」

—『万葉集』を中心として—

田中 禎 昭

はじめに

古代の「サト」をめぐる問題は、従来、律令地方行政制度の郷・里制論を中心に検討されてきた。しかし、史料上には、『万葉集』のほか、ただちにそうした議論の枠組みに収まり切れない「サト」の事例が数多く存在している（行論中、「サト」を漢字表記する場合、五十戸・郷・里制の「サト」を仮に里制の里あるいは「」を付さず里と記し、史料用語としての「里」「郷」と区別する）。

かかる二つの「サト」をめぐる問題について、山田英雄氏は、『万葉集』の歌語には「村」（ムラ）語は使用されずもっぱら「里」（サト）の用例が存在すること、文献史料上の「里」（サト）の熟語形成の進展度から、韓語起源の「ムラ」語よりも「サト」語が日本語として成熟していたこと、また、里（サト）の行政制度としての採用が、その

後「村」（ムラ）語が一般化する背景にあったという注目すべき指摘をされた。

この問題提起を追求した小林昌二氏は、「里」（サト）も韓語起源であり、歌語としての音律保持・表現技巧の制約から『万葉集』の「里」（サト）語への統一の背景を説明し、「村」（ムラ）こそが7世紀以降の集団的主体性をもつ農耕共同体として成立すると述べた。

一方、古橋信孝氏は、「サト」は「村」と置き換え可能な同意異語で、「靈威に満ち溢れ充足した場所」という語義をもつ雅語であるために『万葉集』に歌語として採用されたと指摘する。

以上の研究事情から、山田氏の貴重な問題提起にもかかわらず、『万葉集』の「サト」は集落・「村」を意味する歌語であることが通説となった。その結果、歴史学の側から地域社会の実態を追求する議論は、里制論・「村」論・集

## 古代の「サト」(田中)

落論の中で展開されることになり、里制以外の「サト」史料を地域社会研究の素材として生かす道は閉ざされることになったのである。

しかし、『万葉集』の「サト」は集落・「村」・里を呼称する歌語・雅語にすぎないのだろうか。近年、関和彦氏は、『万葉集』の「サト」が民衆の「古里」意識の基盤である国造段階の在地首長の支配空間「クニ」を意味するという興味深い問題提起をされた。<sup>①</sup>「家」・集落・「村」・里やその他の社会集団の厳密な相違を問題にしてきた古代地域社会論にとり、『万葉集』の「サト」の実態解明は重要なテーマとなるべき課題である。またそれは、歌語・雅語としての統一のみで「サト」の背景を説明する従来の通説を再検討する上でも不可欠の課題となる。<sup>②</sup>

先に試論で展開した「サト」論を踏まえ、『万葉集』を主たる素材に、地域社会研究の新たな可能性を模索したいと考える。

## 一 里制の里

『万葉集』の中で「サト」の用例は、多様な語彙をもち、さまざまな文字表記により表現されている(表1)。以下、これらの語彙・文字表記のバリエーションを整理し、「サト」

の語で表現されたものは何か、その実態への接近を試みてみたい。

まず『万葉集』における「サト」に関わる語彙は、次の6つのパターンに分類できる。

A「サト」(「サトミ」・「サトベ」・「サトビト」)

B地名＋「サト」(「サトビト」)

C「フリニシサト」(「フルサト」・「フルイヘノサト」)

D地名＋「フリニシサト」

E「サトヲサ」

Fその他(「トリ」・「ヲサト」・「ムカウノサト」)

これらの語彙に表現された「サト」は何を意味するのだろうか。文字表記は、①佐刀・左刀(AB)のほか、②里・郷(AB C D F)・③五十戸(BE)が採用されている。②③は、行政制度たる郷・里・五十戸制において採用された文字である。事実、行政制度の里・郷・五十戸の意味で「サト」が使用されている例はA・B・Eの語彙例に確認できる。

たとえば、E「サトヲサ」が里制の里長を示すことは間違いない。B地名＋「サト」の事例では、「角里」(二三八)・「春日里」(四〇七・七二五・一四三四・一四三七・一四三八)・「泉之里」(六九六)・「伊知郷」(八一四)・「伎人郷」(四四五七)が里制・郷制の里・郷として確認できる。A「サト」

のうち、一三八の「里」は「角里」を言い換えたものなので、里制の里を意味する。以上のことから、Eはすべて、A・Bはその一部の事例が、律令行政制度の郷(里)を指すこと、また、それらの確認できる例は全て「郷」「里」「五十戸」の文字が採用されていることが確認できる。しかし、A・Bの残りやC・Dの用例もすべて行政制度としての里を意味しているといえるだろうか。次に、里制の里以外の「サト」の事例について検討を加える。

## 二 宮都のサトーサト・フルサト・フリニシサト

Cフリニシサト、D地名+フリニシサトの事例を検討する。従来、『万葉集』のフリニシサト・フルサトは、「①昔帝都であつた里。②もと住んでいた里。古馴染みの里。」の二つの用例があると考えられてきた。まず、改めてそれらの語義を確認する。

七八「明日香の里」、九二八難波長柄豊前宮の置かれた「味経の原」、二六八「古家の里の明日香」、三三三「香久山のフリニシサト」、六二六「フルサトの明日香」、九九二「平城の明日香」と、「フルサトの飛鳥」、一〇四七「寧楽のフリニシサト」、一〇五九「久尔の京師」Ⅱ「フリニシサト」、一六〇四「寧楽の京師」Ⅱ「寧楽のフリニシサト」。

以上は、以前に宮都のあった場所を「フルサト」「フリニシサト」と詠んでいることが、確実にわかる事例である。さらに、上記の用例との関係から過去の宮都の地を意味することが分かるのが、

四五一・四五二・四五三「故郷(明日香か)、一一二五・一一二六題詞「故郷(明日香の神名火のサト)、一五五七題詞・一五五八「故郷」「古郷(明日香の豊浦寺周辺)、一九三七「故郷(明日香か)、二二八九「藤原古郷(平城京遷都以後の藤原京)。

である。また、六〇九の「故郷」は「打廻の里(五八九)(飛鳥雷丘付近)」と考えられ、「大原乃古尔之郷」「大原古郷」(一〇三・二五八七)は、飛鳥の大原を指し、天武期の明日香浄御原宮周辺の「倭京」と対置して過去の飛鳥の一部としての認識が示されている(一〇三)。なお、八四八題詞は大宰府官人が赴任以前に住んだ平城京を「故郷」と記したものである。

次に、作歌者を見ると表1に示す通り、ほとんどが天皇・貴族・官人層で地方豪族・庶民層は含まれていないとみてよい。

以上の点から、「フリニシサト」(フルサト)とは、天皇・貴族・官人層固有の認識を表す用語であり、その示す場所は過去に置かれ居住した(と信じられた)宮都の地に限定

されるという点が判明する。<sup>8)</sup>

次に、A・B・Fの語彙例に注目してみよう。一〇四七「里」が「寧楽故郷」をさすように、「里」だけで「以前に存在した宮都の地」Ⅱ「フルサト」を指す事例が存在する(九二九・九二八・一〇三九・一〇三八・一〇四七・一一二五)。さらにここで注目したいのは、「サト」(「里」・「郷」)が作歌時点における「現行の宮都の地」を指す例があることである(A—四六〇「里」・一〇五〇「郷」、B—九五二「櫛乃里」・二二八七「平城里人」、F—一〇二八題詞「都里」・四二七二「小里」)。これらの作歌者も全て貴族・官人層と考えられる。したがって、以前に居住しあるいは存在した「昔の宮都の地」も、「現行の宮都の地」も、いずれも貴族・官人層により「サト」(「里」「郷」)と認識されていることが確認できる。

貴族層はなぜ過去現在を問わず「宮都の地」を「サト」と呼んだのだろうか。ここで注目すべき問題は、『万葉集』の歌に「サト」と並んで、「宮都の地」を「ミヤコ」と呼んだ事例が存在することである。すなわち、「ミヤコ」と「サト」の語彙の相違は、かかる語彙を使用した貴族層の「宮都の地」に対する多元的な認識の構造を反映していることを予想させる。また、それらを通じて「ミヤコ」の語彙に反映する地域的秩序と異なる、いわば「サト」的秩序とも

いうべき、これまで明らかにされてこなかった宮都の秩序のうち一つの実態的側面を解明し得る可能性も指摘できる。そこで次に、「ミヤコ」と「サト」の語彙の示す内容と、その相違に検討を加え、貴族層の宮都認識とその背景にある宮都の秩序の実態について検証してみたい。

都「京」「京師」の文字を当てた「ミヤコ」の語彙の表現する認識と実態については、岸俊男氏の研究を踏まえた浅野充氏の指摘が注目される。浅野氏は、「ミヤコ」は天皇の居住建物(「宮」)だけでなく、それに場所(「処」)が付加した広がりをもつ地域を意味する言葉で、そうした「ミヤ」と「ミヤコ」の区別は条坊をもつ都城のみならず、7世紀天武期以前の「倭京的存在形態」においても認められるとした。つまり「ミヤコ」は、7・8世紀を通じて使用された、天皇の「宮」との人格的関係を媒介にして王族・諸豪族の宅・寺などが結集して形成されたデスポティックな地域秩序の表現である。

一方、「サト」は、「ミヤ」ではなく「ミヤコ」に関係する言葉として使用されている。それは、「久尔の京師」を「故郷」、「寧楽の京師」を「寧楽故郷」と言い換え、飛鳥・難波の宮そのものではなく宮のある地域(明日香・大原・味経の原など)を「サト」「フルサト」としている点に現れている。つまり、「サト」と「ミヤコ」は、場所の問題に限っ

ていえば、同一の実態を示しているように見える。そこで当然問題になってくるのは、「サト」と「ミヤコ」の差異、すなわち、「サト」が「ミヤコ」同様、天皇(宮)の体現する力の及ぶ場所(処)を意味しているといえるかどうかである。

\*九二八 押してる 難波の国は 葦垣の フリニシサト  
(古郷)と 人皆の 思ひ息みて つれもなく ありし間に 續麻為す 長柄の宮に 真木柱 太高敷きて 食国を 治めたまへば 沖つ鳥 味経の原に もののふの 八十伴の男は 慮して 都なしたり 旅にはあれども 反歌二首

九二九 荒野らにサト(「里」)はあれども大王の敷きます時は都となりぬ

\*四六〇 栲縄の 新羅の国ゆ 人言を よしと聞して 問ひ放くる 親族兄弟 なき国に 渡りきまして 大王の 敷きます国に うち日さす 京しみに サトイへ(「里家」)は 多にあれども いかさまに 思ひけめかも つれもなき 佐保の山辺に 泣く兒なす 慕い来まして 布細の 宅をも造り あらたまの 年の緒長く 住まいつつ 座ししものを (略)

右は新羅国の尼、名を理願といふ。遠く王徳に感じて聖朝に帰化す。時に大納言大將軍 大伴卿の家に寄住し

史苑(第五八卷一号)

て、既に数紀をへたり。(略)

九二九では、天皇の統治により「都」となる場所が「サト」と認識されている。しかし、ここでは、「都」と「サト」は同一の場所が異なる側面から把握された呼称と考えられ、その違いを具体的に示すのが九二八である。九二八で、「都」は、宮において天皇が統治することを契機に諸豪族が官人(八十伴の男)として「慮して」形成する場所を指す。それに対して、「フリニシサト」(九二九のサトに対応)は「人皆の思ひ息みてつれ(由縁)もなくありし」場所とされている。「都」は「宮」への諸豪族の官人としての奉仕の側面に関わる表現であるのに対して、「サト」は諸豪族が「人」として「ツレ」を求め「思い」を寄せる場としての側面に関わる表現となっている。

四六〇では、「ミヤコ」は「大王の敷きます国にうち日さす京」として大王の統治する場としての側面から把握されているが、一方「サト」は「京」一杯に広がって「多に」存在する「家」の集合体(「サトイへ」として把握される。さらに、「サト」は新羅の尼理願が寄住を求めるべき「家」のある場所(結果として「ツレ(縁)もなき」佐保の山辺に宅を造る)でもある。四六〇では、「サトイへ」に求められる「ツレ」の内容が、「寄住」して「宅」を形成するための縁故として示されている点が注目されるだろう。ここで

## 古代の「サト」(田中)

も、①「ミヤコ」と「サト」の対置構造、②「サト」が「ツレ」で結ばれる関係に関わる、という九二八と同一の側面を見いだせる。「ツレモナキ」は、孤独な死者を歌った「家人の待つらむものをツレモナキ(津煎裳無) 荒磯をまきて伏せる君かも」(三三四一)の例や草壁皇子の殯宮を「ツレモナキ(由縁母無) 真弓の岡」(一六七)と表現する例のように、「家人」等との「由縁」||つながりの存在しない孤独な場所(荒磯・真弓の岡)を形容する場合に用いられる歌句であった。「サト」は、本来、このような「由縁」(「ツレ」)により「家」相互の繋がりが保たれた場所として認識されていたことがわかる。

『万葉集』では、宮都の「サト」意識は、「家」のある場所を日常生活の中での人間関係(恋愛関係など)の展開する場所として貴族自身が認識したところに表出している。それは、以上の検討を踏まえれば、「ミヤコ」と「サト」が同一の場を示しながら、貴族の「ミヤコ」認識が天皇の「宮」の支配関係を媒介にして形成されたものであるのに対して、「サト」認識が貴族の「家」の相互関係の中で結ばれる日常的諸関係(「ツレ」)を媒介にして形成された意識であることを示唆している。ここで提起された問題を深めるには、宮都の「サト」がとり結ぶ関係秩序(「ツレ」)の具体的内容とその特質の解明が必要である。以下、それについて項

を改めて述べることにしたい。

### 三 宮都のサト2

地名+サトに現れた宮都のサトの具体的存在形態——  
語彙:パターンB地名+「サト」の事例のうち、「檜乃里」・「平城里人」は、平城京を「ミヤコ」的秩序とは異なる側面から認識した呼称であり、里制の里とは異なる認識を示す用例であった。その他にもBパターンには、里制の里と異なる宮都の「サト」を示す用例がある。以下、それらについて確認する。

#### ① 「田村里」

「田村里」は、『万葉集』では七五七・四二六八に見える「サト」である。かつて岸俊男氏は、藤原仲麻呂の「田村第」の比定に関連して、「田村里」の人的構成と比定地について詳細に論じられた。ここでは岸氏とその後の研究を踏まえ、試験の範囲内で「田村里」の性格について考えてみたい。  
A 大伴田村家之大嬢贈妹坂上大嬢歌四首

#### (略)

七五七 遠くあらばわびてもあらむをサト(「里」) 近く  
ありと聞きつつ見ぬが術なき

(略)

右、田村大嬢坂上大嬢、並是右大弁宿奈麻呂卿之女也。卿、居田村里。号曰田村大嬢。但、妹坂上大嬢者、母、居坂上里。仍曰坂上大嬢。于時姉妹諮問、以歌贈答。

B 天皇太后共幸於大納言藤原家之日、黄葉沢蘭一株拔取、令持佐々木山君、遣賜大納言藤原卿并陪從大夫等御歌一首 命婦誦曰

四二六八 このサト(「里」)は継ぎて霜や置く夏の野にわが見し草は黄葉ちたりけり

C 『新撰姓氏錄』左京皇別下  
吉田連

(略) 男從五位下知須等。家居奈良京田村里間。仍天璽国押開豊桜彦天皇<sup>諡聖</sup>。神龜元年。賜吉田連姓。<sup>吉本姓、田取居地名也</sup>

今上弘仁二年。改賜宿禰姓也。続日本紀合。

D 『続日本後紀』承和四年六月己未条

右京人左京亮從五位上吉田宿禰書主。越中介從五位下同姓高世等。賜姓興世朝臣。(略)子孫家奈良京田村里。仍元賜姓吉田連。

岸氏は、「田村第」は平城京左京四条二坊九坪く十六坪の地を占める(現在発掘調査により一部確認)が、「田村里」そのものは左京四条二坊・五条二坊を含みその「付近一帯のかなり広い地域」であつたことを明らかにした。問題は

史苑(第五八卷一号)

なぜ、里制の施行されない平城京の一地域が「田村」という名称を付した「サト(「里」)と呼ばれたかである。岸氏は、平城京設定以前の添上郡における五十戸一里の里が平城京設定後も地域呼称として残存したものと処理されているが、そうした考えは妥当であろうか。

まず、朱雀門北側下道道路遺構下層溝(SD1900)から藤原京時代の「大野里」と記す木簡および「五十家」「五十戸家」と記す木簡(『平城宮木簡二・解説』、奈良教育委員会編『藤原宮』)、また、藤原宮跡より「倭国所布評大口里」と記す木簡が出土し、平城京朱雀門周辺一帯は遷都以前大野里に編成されていた可能性が出てきた。

次に『万葉集』の歌だけでなく、史料C『姓氏錄』・D六国史という国家の公的記録に「奈良京田村里」の名称が見えること、また、『万葉集』(A)も、歌語を記す必然性のない左註部分に「田村里」の名称が見える点が注目される。初めに述べたように、地域の社会集団を意味する「村」の語は、歌句の中では使われず、題詞(八一三・三九九一・四〇二六・四一三二・四一五九)・左註(三八六九・四〇一五)に現れる。つまり、題詞・左註では、歌語に制約されず、他の公的記録に通用する呼称をもって、地域社会の「場」を表現していた。この点を踏まえれば、「田村里」の「里」は明らかに歌語ではないといえるだろう。

古代の「サト」(田中)

以上の点から、平城京遷都以前に当地域が「田村里」なる里制に編成された可能性は低く、むしろ、平城京の置かれた時代に「田村」を「里」(「サト」)とする認識があったこと、かつそれが、たんなる歌語や貴族の主観的認識の所産ではなく、公的に通用する客観的な実在であったことを証明できる。このような「里」は里制の里の遺制とは到底いえない社会的存在であり、また同時に、「村」とも意図的に区別された、実態的な地域単位であるといえるであろう。次に先学の成果を踏まえ、「田村里」に入ることが確認される左京四条二坊・同五条二坊における住民構成を見ることを通して、その性格を考えてみたい。

a 藤原仲麻呂(田村第・田村家)

左京四条二坊九坪〜十六坪(天平勝宝四年以前〜天平宝字七年)

b 田村宮

左京四条二坊十一坪(天平宝字元年)

c 田村旧宮(宝龜六年)

d 田村後宮(延暦元年)

e 藤原是公(田村第・田村家)

左京四条二坊九坪〜十六坪(延暦三年)

f 東大寺(園)

左京五条二坊九坪(天平勝宝八年〜)

g 東大寺(宮宅)

左京四条二坊十二坪(天平勝宝八年〜)

h 楊梅院領掌地(園・宮宅)

左京四条二坊十二坪・五条二坊九坪(延喜二年以前)

i 市原王

左京四条二坊二坪(一坪の邸宅跡)(天平宝字二年)

j 大伴宿奈麻呂・田村大嬢(大伴田村家)

k 吉知須等(家)・吉田連(家)(養老三年以上以降)

l 石上部君鷹養戸口口上部君嶋君

左京四条二坊

b 田村宮は、田村第一画を占める場所に位置し、皇太子大炊王宮と見る通説のほかに、孝謙天皇の行宮とみる説がある。c・dの田村旧宮・後宮は田村宮の仲麻呂没後の伝領宮と考えられている。東大寺宮宅および楊梅院との関係など、田村宮をめぐる複雑な問題が残るが、天平勝宝四年から天平宝字元年にかけて、左京四条二坊九坪〜十六坪の内部に孝謙天皇御在所・東大寺宮宅・田村宮(孝謙行宮あるいは田村皇太子宮)が所在したことはほぼ間違いない。また、天平宝字二年には、市原王が田村第に隣接する左京四条二坊一坪の地に居を構えていたことが推測されている。東大寺宮宅の設置また市原王の居住は、仲麻呂の政治的派閥関係の形成と関係するが、詳細は岸氏の論稿に



譲りたい。

次に注目されるのが、k 吉知須等（家）・吉田連（家）である。CDともに、吉氏の子孫が「家居奈良京田村里」したので吉田連を賜姓したとする。さらにCでは詳しく「男從五位下知須等家居奈良京田村里」と記し、賜姓の時期は神龜元年五月、その根拠は「吉本姓、田取居地名也」とする。一方、『続日本紀』神龜元年五月辛未条に「從五位上吉宜・從五位下吉智首並吉田連」を賜うという『姓氏錄』の記事と同類の記述がある。吉知須は吉智首と同一人物であろう。とすると、『姓氏錄』の「知須等家」の「等」の文字の挿入の意味が問われることになる。それについては、『続日本紀』の吉智首だけでなく吉宜を並んで吉田連の氏姓を賜ったという記述から、「等」が知須以外に宜をも含んでいるという理解で解決できると思われる。したがって、「奈良京田村里」に「居」したのは、吉宜と吉智首の「家」であろう。『姓氏錄』が知須、『続日本紀』が智首とするのは、『姓氏錄』が参照した史料が『続日本紀』と系統を異にした記録でありその記載を忠実に引き写し、その後『続日本紀』と照合した（『続日本紀合』）ことを示している。にもかかわらず両者の記録の年時と「等」に表れている記述内容の基本的一致は、『姓氏錄』の記述の信憑性をより高いものとしている。『姓氏錄』が上位の宜の名を省き知須の名で氏を

代表させているのには複雑な政治的背景がありそうだが、ともかく吉宜と吉智首がともに奈良京田村里に「家居」し、そのことを根拠として吉宜と吉智首が並んで吉田連姓を賜ったことは間違いないであろう。さらに注目されるべきことは、『続日本紀』当該条文の改賜姓者の中で唯一、二人並んで同じ氏姓を与えられていることである。吉宜と吉智首はそれぞれ五位の位階をもち「家」政機構を持ち得る立場にあった。私は、二人が各々独立した「家」を構成し、神龜元年に二つの「家」を吉田連氏という一つの氏に統合したと考える。

ところで、藤原仲麻呂の台頭期に、吉田連兄麻呂という人物が確認される。兄麻呂は、仲麻呂が紫微中台の長官に就任した天平勝宝元年八月十日、皇后宮職大属から外從五位下で紫微少忠に拔擢された人物であり、光明皇后の下で仲麻呂の権力基盤を支える一人であった。兄麻呂が宜家、知須家いずれの出身かは定かでないが、その位階・官職から見て「田村里」に「家」を構成していたことは間違いない。吉田連家は、仲麻呂田村家と政治的閥族を形成していた。

大伴田村家に、大伴宿禰宿奈麻呂とその娘の大伴田村大嬢が居していたことは、『万葉集』(A)から知られる。そして、「田村里」の名称は、田村大嬢の号の起源になっただけ

## 古代の「サト」(田中)

でなく「大伴田村家」という大伴宿禰氏の一「家」の名称の起源にもなっていた。

以上、「田村里」の検討からは次のことが確認できる。第一に、「田村里」は「奈良京田村里」と呼ばれる、里制および京一坊の律令行政制度の枠内に収まらない、また「村」とも区別される宮都内の実態的な地域単位であったこと。第二に、「田村里」への「家居」が、藤原仲麻呂の田村家、大伴宿禰宿奈麻呂・大伴田村大嬢の大伴田村家、吉宜家(吉田連氏)、吉知須家(吉田連氏)それぞれの「家」名・「家」を基礎にした「氏」名の根拠になっていること。第三に、「田村里」に同時代に並存が確認できる「家」、すなわち仲麻呂の田村第の時代の「田村里」の居家である、仲麻呂田村家、田村宮、東大寺宮宅、市原王家、吉田連兄麻呂家は、家政機関をもつ独立した「家」の相互関係を藤原仲麻呂派の政治的派閥に転化したこと、以上である。第二の点は、「里」の構成単位が「氏」でなく、「氏」内部の個人を軸に構成される相互に独立した「家」に認められていたことを物語っている。そしてさらに第三の点は、「田村里」内部の血縁の範囲を超えた他「家」同士の相互交流が、貴族間のネットワーク(ツレ)を形成しており、それが、仲麻呂の政治的派閥形成の基礎の一つになり得たことを示している。

## ②「坂上里」

「坂上里」は、七五七から「田村里」と「里近く」あったことが知られる。『延喜諸陵墓式』の「平城坂上墓」は、現在の磐之媛陵ではなくウワナベ古墳が相応しく、また東三坊大路―コナベ越えが8・9世紀の平城坂越えのルートであったという見解が提出されている。この見解に従えば、「平城坂上」すなわち「坂上里」の場所は、ウワナベ古墳付近を含むことになる。田村第・田村宮・市原王宮の所在する左京四条二坊の東を限る二坊大路を北に直進すると北一条大路で京の北端に到達するが、ここにウワナベ古墳の西南部が接している。つまり、ウワナベ古墳の所在する「平城坂上」と「田村里」は二坊大路一本で南北に結ばれることになる。「坂上里」と「田村里」が「里近く」と言われた背景には、このような交通事情がある。つまり「坂上里」は、平城京北端に接する位置に所在したのである。また当地が里制の里に編成されていた証拠は認められない。七五七の左註で「田村里」と対称して「坂上里」を引いていることから、両者は同性格の「サト」であり、「坂上里」は「宮都のサト」に準じた性格を持っていたと考えられる。なお、大伴坂上郎女は「坂上里」に居し、それを根拠としてその娘(田村大嬢の異母姉妹)は「坂上大嬢」を号した(七五七左註)。なお、大伴坂上郎女は「大伴坂上家之大嬢」(五八

一」と呼ばれ自立した「大伴坂上家」を構成していたことが知られる(五二八)。ここでも、①の仲麻呂田村家、大伴田村家、吉宜家(吉田連氏)、吉知須家(吉田連氏)同様、「里」名が「家」名の根拠になっていることが確認される。

### ③「須我波良能佐刀」(菅原里)

\*四四九一 大きな水底深く思ひつつ裳引きならししスガワラノサト

右一首、藤原宿奈麻呂朝臣之妻石川女郎薄愛離別、悲恨作歌也。(年月未詳)

「スガワラノサト」は、藤原宿奈麻呂(良継)あるいは石川女郎夫妻の居住した「佐刀」であった。元明天皇は、A和銅元年九月十四日、「行幸菅原」し、B十一月七日、「遷菅原地民九十余家給布穀」い、C十二月五日には「鎮祭平城宮地」した(以上『統日本紀』和銅元年条)。和田萃氏は、Cの記事の前提にBの記事が存在することから、「菅原地民九十余家」は宮地内に存在した家の総数にすぎず、平城遷都以前に「菅原地」はさらに大規模に広がっていたとみている。

推古十五年築造の「菅原池」<sup>⑤</sup>は、右京六条三坊の南端部分から七条三坊の約北半分にかけて所在する、近世に「大池」と呼ばれた蛙股池に比定されている。平城京の設営時

の整地の有無は不明だが、四四九一の中に見える「大きな海」が「菅原池」を示す可能性は考えられる。なお、右京三条三坊の地に建立された「菅原寺」は行基の布教の拠点であった。さらに右京三条三坊の南に隣接する右京四条三坊には、「菅原伏見東陵」(「延喜式」・垂仁陵)がある。以上の点から、八世紀の「菅原地」「菅原」は、右京三条三坊・三条四坊を中心に南は右京七条三坊、北は右京三条三坊より東北にあたる平城宮地の一部を含む右京三条を中心にした広い部分を占めていた可能性がでてくる。

しかし、平城遷都以前のA Bの段階で、当地域は「菅原地」「菅原」として登場しており、遷都以前にそれが菅原里なる里制に編成されていた形跡は認められない。一方、「天平十九年法隆寺伽藍縁起并流記資財帳」<sup>⑥</sup>に「添下郡菅原郷」が見え、東を平城京西京極に接した京外の西大寺奥院西方の地に比定されている。したがって、八世紀後半、平城京内の「スガワラノサト」と京外の「菅原郷」が同時並存したことが確認される。「菅原郷」は五十戸一郷制の郷と考えられ、このことは、「スガワラノサト」が、里制の里の遺制ではなく、むしろ平城京における固有の実態的地域概念であったことを示しているのである。

「菅原」は、また、土師氏の一族の「居地」であった。延暦四年、土師宿禰古人等は、「因居地名、改姓菅原」した

(『続日本紀』延暦五年五月癸卯条)。なお、土師宿禰氏の延暦期の改賜姓は、土師宿禰古人等(菅原宿禰)、菅原真仲・土師菅麻呂等(大枝朝臣)、高野新笠外祖母土師宿禰(大枝朝臣)のように、個人を単位にその周囲の人間を含めた形でその都度行われ、それが官人個人の周囲に形成され、そのために絶えず流動する「家」単位の賜姓であつたことが分かる。延暦五年五月の改賜姓は、単なる氏の分割賜姓ではなく、土師宿禰古人等の「家」が「居」す地名たる「菅原」による改姓であつただろう。「菅原」は、「田村里」「坂上里」同様、個人を中心にその都度形成される「家」の帰属を確認する場である。「スガワラノサト」における、そうした「サト」と「家」の関係は、「田村里」「坂上里」で見てきたものと同様である。

#### ④「元興寺之里」

\*大伴坂上郎女詠元興寺之里歌一首

九九二 フルサト(「古郷」)の飛鳥はあれどあをによし

平城の明日香は見らくも好しも

「フルサトの飛鳥」と「平城の明日香」の対称は明白である。ここで「フルサト」は、元興寺を含む過去の「ミヤコ」としての「飛鳥」全体を「サト」としての側面から把握した名称であり、それに対して「平城」は、現在の「ミヤコ」

(平城京)を「サト」としての側面から把握した名称であると思われる。したがって前半の「飛鳥」は飛鳥元興寺周辺を、後半の「明日香」は平城京元興寺の周辺(「元興寺の里」)を指している。すなわち、ここには、平城京全体を指す「平城(ノサト)」とその一部地域の「元興寺の里」という宮都の「サト」の二重構造が現れている。この宮都の「サト」の二重構造は、前節で検討した「平城里」と、上述の「田村里」「坂上里」「スガワラノサト」「元興寺の里」等の二種類の宮都の「サト」の関係を表現する。「京しみに里家は多にあれども」(四六〇)の歌句は、平城京全体が多くの「里家」によつて構成されている様子を表現しているが、それは、平城京全体が「田村里」「スガワラノサト」等、「家」を基礎単位とする複数の「里」の累積から成り立っている構造を示しているのではないか。また、「元興寺の里」は、歌の中ではなく題詞部分に現れる表記である。このことは、先述の如く「里」が歌語や主観的認識の所産ではなく、現実に通用した地域社会の名称であつたことを物語っている。元興寺は、外京四条七坊から五条七坊にかけて所在していたが、「元興寺の里」はその付近一帯を示す呼称であろう。「元興寺の里」の内部的諸関係は不明だが、平城京には、このような寺の周囲に形成された「里」が他にも存在した。次にそれらの事例を『日本靈異記』から拾つておくことに

する。

### ⑤「寺」付近の「里」

a 「大安寺之西里」(中二四)・「奈羅京大安寺之西里」(中二八)、b 「諾樂右京殖槻寺之辺里」(中三四)、c 「奈良京薬師寺東辺里」(下一二)。

(『日本靈異記』)

「ナラ京―里」は、「奈良京田村里」と同様の用語法を示しており、上記の例は、すべて「田村里」と同性格の「里」であったことを示唆する。

次にこれらの「里」の比定地を確認しておこう。

a に見える大安寺は、左京六条四坊・七条四坊の地を占めたが、その西は七条三坊・六条三坊が中心となるはずである。近隣の「田村里」の南限が確認できる地域は五条二坊なので、仮に「大安寺之西里」が七条二坊・六条二坊にわたっていたとしても、それに隣接しても領域が重複することはない。

b は、殖槻寺が殖槻八幡宮傍らの観音堂を比定地とする、右京九条三坊付近が「殖槻寺辺里」の所在地となろう。「菅原里」は右京七条三坊まで及んでいたと考えられるので、その近在に同「里」が存在することになる。

c は、薬師寺が右京六条二坊四坪を除く地域を占めたため、その「東辺里」は右京六条一坊を中心地とするはずで

ある。なお、薬師寺の西隣は、右京六条三坊が「菅原里」に入ることを確認したので、「薬師寺東辺里」は薬師寺を挟んで「菅原里」と隣接していることになろう。

以上の例を組み込んで、「里」の所在地を平城京全体に落としていくと、京のかんりの領域をこれらの「里」が占めることが確認できる。しかしそれでも、これらの「里」は京内においてその領域を全く重ねることがない、という事実には気付くのである。

なお、『日本靈異記』からは、近隣の寺を生活の抛り所(「ツレ」ある場)とする「里人」の姿が描かれており多くの示唆を受ける。ここでは、a の中巻第二十四話の次の記事に注目しておきたい。

＊檣磐嶋者、諾樂左京六条五坊人也。居住于大安寺之西里。聖武天皇世、借其大安寺修多羅分錢卅貫、以往於越前之都魯鹿津、而交易以之運超、載船将来家之時、忽然得病。思留船单独来家、借馬乘来。(略)

左京六条五坊という坊はなく、大安寺之西は六条三坊になる、六条五坊は六条三坊の誤りであろう。注目すべきは、檣磐嶋の所属を示すのに、条坊呼称と「里」の二つを記述している点である。本来、居地を示すならば、「居住于大安寺之西里」の記述があれば十分である。事実、a 中二八では「奈羅京大安寺之西里、有一女人」、b 「諾樂右京

# 古代の「サト」(田中)

殖槻寺之辺里、有一孤嬢」、c「奈良京葉師寺東辺里、有盲人」として、人の帰属を示すのに条坊呼称は使用されていない。a中二四のみが「左京六条五坊人」という条坊呼称を付している。これは、榑磐嶋が条坊制と「里」双方によりその帰属が確認されている証左ではないだろうか。条坊による帰属確認の本質は、国家の、坊(坊令・坊長)―戸制に基づく編戸による本貫の把握にあることはいうまでもない。大安寺修多羅分錢という官寺の公的用途調達のための出挙を受ける対象―磐嶋はそれを交易により私富集積の手段に転化するが―であることが説話の背景として語られなければならないため、榑磐嶋の本貫の所在が明示されたと考えたい。

榑磐嶋の例は、経営(交易活動)拠点としての「家」の帰属が、戸籍に編成された本貫地としての条坊ではなく、「寺」との相互関係(「ツレ」)を構成する宮都の「サト」により確認されたことを示しているのである。

以上、八世紀の宮都の「サト」に関して述べてきた点を整理しておく。

宮都は、「ミヤコ」と「サト」の二つの側面をもっていた。「ミヤコ」は、先学の指摘の通り、天皇の「宮」を中心にして形成された天皇と貴豪族層の支配と奉仕の関係が具現す

る専制的秩序の表現である。一方、貴豪族層が「家」の帰属を自らが積極的に確認し、その「家」名の根拠とするごとく「家」を支える基盤として認識した地域秩序として、「サト」としての宮都の秩序があった。「サト」と呼ばれた諸関係は、天皇と貴豪族層のタテの支配秩序を媒介にせず、に、相対的に自立した日常生活諸関係の展開する場として認識された。また、そうした支配秩序を媒介にしない貴豪族層のヨコの諸関係の基礎には、天皇を媒介せずに「家」相互が「家」の相互利益のために「由縁(「ツレ」)ある関係を結ぶという集団秩序の形成方式が存在した。こうした「サト」のなかの「家」の相互関係は、氏の範囲を超えたものであり、またそれは、条坊―戸の制度的関係の枠外にあった、それと並存した「里―家」の秩序として存在していたと考えられる。すなわち、宮都の「サト」は、単なる歌語・主観的認識の所産ではなく、また里制の里とも「村」とも区別される、固有の構造をもつ宮都の集団的秩序の実態的な一側面である。その構造とは、平城京内の複数の「里―家」の累積により京城全体として「里」が成り立つ、という「家」の相互関係の累積により成立する二重の諸関係でもある。こうした「里」は、「平城里」―「田村里」「坂上里」「菅原里」「元興寺之里」「大安寺之西里」「殖槻寺之辺里」「葉師寺東辺里」の諸関係として、具体的に確認できるのである。

#### 四 在地の「サト」

##### ①人言・人目と「サト」

最初に分類した「サト」の語彙表記のうち、Aの「サト」の事例の中には、歌の主題の中で共通する特徴をもつものが存在している。それは、「サト」が「男女の恋愛関係の成就を左右する条件として現れてくる事例」(以下この用例をA—xとする)である。

\*柿木朝臣人麻呂、妻死之後、泣血哀慟作歌二首 并短歌

二〇七 天飛ぶや 軽の路は 吾妹子が サト(「里」)にしあれば ねもころに 見まく欲しけど 止まず行かば 人目を多み 数多く行かば 人知りぬべみ 狭根葛 後も逢はむと(略)

\*一二四三 見渡せば近きサトミ(「里廻」)をたもとほり 今そわが来る禮巾振りし野に

\*一五一五 言繁きサト(「里」)に住まずは今朝鳴きし雁に副ひて往なましものを

\*一九七八 橘の花散る「里」に通ひなば山霍公響さむかも

\*二五六二 サトビト(「里人」)の言縁妻を荒垣の外にやわが見む憎くあらなくに

\*二五九八 遠くあれど君にそ恋ふる玉梓のサトビト(「里人」)皆にわれ恋ひめやも

史苑(第五八卷一号)

\*二八〇三 サトナカ(「里中」)に鳴くなる鶏の呼び立てていたくは鳴かぬ隠妻はも 一に云はく、サト(「里」)響み 鳴くなる鶏の

\*二八七三 サトビト(「里人」)も語り継ぐがねよし多やし恋ひても死なむ誰が名ならめや

\*二八七六 サト(「里」)近く家や居るべきこのわが目人目をしつつ恋の繁けく

\*三二七二 打ち延へて 思ひし小野は 遠からぬ そのサトビト(「里人」)の 標結ふと 聞きてし日より 立てらくの たづきも知らず 居らくの 奥處も知らず

親びにし わが家すらを 草枕 旅寝の如く 思ふそら 安からぬものを 嘆くそら 過し得ぬものを 天雲の

ゆくらゆくらに 蘆垣の 思ひ乱れて 乱れ麻の 麻 箭を無みと わが恋ふる 千重の一重も 人知れず も

となや恋ひむ 息の緒にして

\*三三〇二 紀の国の 室の江の辺に 千年に障ること無く 万世に 斯くしあらむと 大船の 思ひたのみて

出で立ちの 清き渚に 朝風ぎに 来寄る深海松 夕風に 来寄る縄苔 深海松の 深めし子らを 縄苔の

引けば絶ゆとや サトビト(「散度人」)の 行きの集ひに 泣く兒なす 鞆取りさぐり 梓弓 弓腹振り起し 志

乃岐羽を 二つ手挟み 放ちけむ 人しくち惜し 恋ふらく思へば

古代の「サト」(田中)

\*三四六三 間遠くの野にも逢はなむ心なくサト(「里」の真中に逢へる背なかも)

\*三五七一 己妻をヒトノサト(「比登乃左刀」)に置きおぼしく見つつぞ来ぬる此の道の間

右の史料では、「サト」は男女関係の成就にとり、いかなる制約条件として機能しているだろうか。これらの歌の構造を整理して気付くことは、以下の諸点である。

第一に、「サト」外の男性が「サト」で女性と関係を持つとうとする時に、女性の属する「サト」の「サトビト」が両者の恋愛関係の成就を妨げるという状況がある。三三〇二・一九七八(山藿公は「サトビト」の譬喩)は、いずれも女性の住む「サト」の外の男性の「通い」を「サトビト」が妨害する状況を作歌の背景としている。

第二に、「サトビト」以外の男性は、「サト」内部の女性をめぐり、「サトビト」≡男性集団と対抗しながら関係をもちとうとする状況があつたことである。三二七二は、女性(小野に喩える)の住む「里」と作歌者(男性)の居る場所は近いが、女性の側の「里人」により女性が「標結され、「里」外に在る作歌者(男性)は思い乱れている」という例である。二五九八は、作歌者(女性)の住む「里」と男性の居る場所は遠い(「里」外)にもかかわらず、「里人皆」に恋をせず、「里」外に在る男性一筋に恋する」という例である。

また、二五六二は、作歌者(男性)が女性の住む「サト」の中で女性(「里人」の言縁妻)を囲む「荒垣」の外から見ようとするのを「里人」は非難(人言―二五六一・二五六三)するだろうが強い恋心のゆえに気にしない、という男性の決意を歌う。三五七一の己妻を「人の里」において旅立つ不安も、このような文脈の中で理解できる。

第三に、男性が女性の「サト」の妨害に対して、それを克服して男女関係を実現しようとする行為が「サトビト」の非難を覚悟すればある程度可能であつたことである。二八七六・二八七三はいずれも「サトビト」の「人言」を跳ね返して男女の愛を貫こうとする決意を歌つたものである。それは、女性の住む「里人」の繁き「人言」が「讒す」状況を打ち破ろうとする気持ちに関わっている。

第四に、「サト」外部の男性と「サト」内部の女性が関係を結ぶ時、女性の「サト」の「サトビト」の非難をかわす抜け道が存在したということである。一二四三は、女性の住む「サトミ」(里廻)を作歌者(男性)が迂回して女性が禮巾振る「野」にやつてきた、という例。一二四三の類歌には「岡の崎廻みたる道を人な通ひそありつつも君が来まさむ避道にせむ」(十一―二三六三)、「見渡せば近きわたりをたもとほり今か来ますと恋ひつつぞ居る」(十一―二三七九)がある。ここから、たとえば女性の住む「サト」が近く



とも「サト」外から来る男性は「サト」で会うことを避け、「野」「岡の崎」で会わなければならない事情があったことが知られる。こうした「サトビト」を避けた出会いの場を表現する「避道」という名詞の確立していることは、それが、社会慣行として容認されていたことを物語る。このような慣行は三四六三に、女性の住む「サトの真中」で逢はず「間遠い野で逢おうとする」ルールの存在により確認できる。また、二八〇三からは、作者（男性）が、「サト中」に住む女性を「隠妻」とする慣行があったことが知られる。

以上四つの特徴から言えることは、異なる「サト」に帰属する男女の婚姻関係の成立が女性の「サト」の側で問題になり、女性の結婚相手を同じ「サト」の男性に求めるよう働き掛ける圧力が異なる。「サト」に住む男女双方に及んだ、ということである。また、男性の結婚相手を「サト」外部に持つことについて男性の「サト」で問題にされた例はなく、そのため、結婚相手を外部に持とうとする男女の結婚の可能性はかかる圧力にも関わらず未だ開かれていたともいい得る。女性の結婚を「サト」内部に抑制しようとする「サト」の圧力と、結婚相手を「サト」外部に持とうとする男女の志向との軋轢は、女性の獲得をめぐる「サト」同士の競合を起こすことになり、そのような軋轢と矛盾が生み出す困難と苦悩が、以上の歌の主題を生み出す共通の

史苑（第五八巻一号）

背景にあったと考える。そして、こうした女性の確保をめぐる「サト」同士の競合は、男女の「サト」外婚の禁制が体制的に確立していない以上、恒常的に再生産される矛盾であり、そうした矛盾がさらなる闘争に発展することを回避するために、「避道」「隠妻」という抜け道（避難所）の存在が慣習的に用意されていたのではないかと思われる。

以上のことは、男女の恋愛関係の成立を「サト」内外で未だ容認しながらも、女性に対して、同じ「サト」の男性と結婚することをより強く求める社会的規制（規範意識）が高まりつつある状況を示しているのである。

②婚姻秩序をもつ「サト」の実態

以上にみてきた「サト」の婚姻秩序は、婚姻にかかわる固有の規範意識を持つ「サト」という社会集団の存在を示唆する。次にこれらの歌群に表現されている「サト」がいかなる実態を表現したものかについて検討したい。この問題を解く手掛かりになるのは、A—x歌群の収載巻構成の問題である。次にその点を確認しておく。

\*二〇七巻二、一二四三（巻七）、一五一五（巻八）、一九七八（巻十）、二五六二・二五九八・二八〇三（巻十一）、二八七三・二八七六（巻十二）、三二七二・三三〇二（巻十三）、三四六三・三五七一（巻十四）、四一〇六（巻十八）

# 古代の「サト」(田中)

まず、A—xの歌群が、巻十一～十四の作者未詳歌巻に集中して現れている点が注目される。

かつて巻十四の東歌は、東国地方の民謡的性格をもち、巻十一・十二の所載歌は畿内地域の民謡的性格をもつとする説があった。巻十一・十二の民謡性は、その後批判され、多くは、知識人、貴族・中・下級官人が広く層をなす人々の群が、「みなか」の生活体験を基にした創作歌であると考えられている。巻十四の東歌についても、集団歌謡を少数含むが、ほとんどが東国人の創作歌(叙情歌)であると思われる。

このような研究動向を踏まえてA—xの歌群を見直してみると、それらの種類の歌が、ほとんど都の貴族層の作った作者判明歌に現れないことが注目されてくる。このことは、作者が貴族層ではないが在地生活を体験しそれを創作歌として表象し得る階層——豪族層・村首層・有力家長層クラス等——を中心としていた可能性を示唆している。A—x歌群のうち、東国の民衆社会の中で生み出された歌であることが明白なのが、巻十四・三五七一の防人歌・三四六三の東歌である。既述のごとく三四六三には、「避道」の慣行が見え、それが東国社会の在地の婚姻秩序に存在したことを示す。その類歌(二三七九・二三六三)は、さらに巻十一に収められている。この点も巻十一・十二のA—x歌群

の作者が巻十四の歌の作者と同様の性格をもつ、畿内の在地社会の生活者であることを示しているのである。

ところで、巻十一・二三七九の類歌が、巻七・一二四三の例である。一二四三は、山の旅を主題とする一二四〇～一二四三と一組を為す歌であるが、本来は人目をさけつつ隠妻を訪れる時の歌を、山の旅の三首の後に、旅の歌として転用したもの、と位置づけられている。旅の歌としての転用の主体は貴族層と考えられるが、その素材は巻十一・二三七九に見られるように在地的な基盤を保持した歌の中から選択されたものである。巻十・巻十三については詳論できないが、巻十は譬喩歌で貴族の遊戯の中で類歌を素材にしながらかつて創作されたもの、巻十三は物語歌を指向したもの<sup>25</sup>と思われる、いずれの歌も、貴族層が在地的基盤をもつ「サト」の婚姻秩序に関わる類歌の知識を背景にしながらかつて、虚構的に創作したものと考えられる。

最後に巻二・二〇七の作歌者の明らかなA—xの「サト」の用例を見ておきたい。二〇七は柿本人麻呂が妻の死を悼んで作った「泣血哀慟歌」の一首で、第一に、「里」が「軽の路」「軽の市」、すなわち「宮都の地」を意味すること、第二に、妻の家にに婦屋が用意され妻の両親に婚姻を承認されている(二一〇・二二三・二一六)にもかかわらず、「人目」を気にしていること、の二点が注目される。関口裕子

氏は、第二の点に注目し「人言が夫と妻の關係さえ規制している」ことから、人言（人目）自体に婚姻の社会的統制の意味はないとされた。「サト」が周囲に認知される以前の男女の恋愛關係を規制する上記の例と異なり、この場合の「人目」が「サト」の婚姻規制を表現しないことは確かである。しかし、当該例は、「サト」が宮都の地を意味するA—xの中の唯一の事例であり、さらに、宮都付近（「サト」における官人層の婚姻生活を歌った虚構的な創作歌<sup>27</sup>と考えられるものである。たとえば、大伴家持とその正妻大伴坂上大嬢との逢瀬が「人目」を気にするものであったように（七四八・七五二）、認知された結婚後にも出会いの制約となる「人目」は官人層に問題になるものとして登場しており、それは婚姻の社会的規制ではなく、官人男女の個人的事情に関わる問題についての周囲の目・噂を、定型表現たる「人言」「人目」に仮託して虚構的に表現しているにすぎない。したがって、ここから在地社会の婚姻規制を読み取ることができないのは当然である。

『万葉集』にみえる全ての「サト」のうち、卷十一・卷十二・卷十四に登場する用例は、「サト」「サトビト」を男女關係を制約する条件として歌う歌群（A—x）に限定される。そして、卷十一・十二・十四は、畿内・東国の在地社会（「サト」に基盤をおく豪族・百姓層の創作歌を収載する巻であっ

た。一方、A—x歌群のうち、卷二・二〇七のみが、宮都の「サト」として登場するが、それは虚構性の濃厚な人麻呂の創作歌であったことが確認される。このようなA—x歌群の収載巻構成の特徴は、そこから抽出される「サト」の婚姻秩序が、在地社会に存在したものであることを明瞭に示しているといえる。そして、このような「サト」の婚姻秩序は、里制の里の行政的支配秩序とも、「村」の支配秩序とも位相を異にする、「サトビト」に体现される在地社会の集团的秩序の存在を背景にすると考えられるのである。

## 五 むすびにかえて―「サト」と「家」―

前節で明らかにしてきた在地社会の「サト」の婚姻秩序は、いかなる意味をもつのだろうか。7・8世紀における族外婚制の存否、後期対偶婚段階の特徴として示される単婚への傾斜<sup>28</sup>、家父長制への指向を貴族・首長層の支配層に認めるのか、共同体成員のレベルにまで下げて考えるのか、という問題については論争があり、決着がついていない。前節で指摘した「サト」の婚姻秩序の問題は、当然、こうした論争の中で明らかにされた古代婚姻史の個別的事実についての評価抜きにその社会的意味をとらえることは難しい。そこで、最後に、『万葉集』卷十八・四一〇六の「サト」

史料を取り上げ、前節までの検討結果を踏まえて展望すること、むすびにかえたい。

\*『万葉集』巻十八

(略) 詔書云、愍賜義父節婦。謹案、先件数条、建法之基、化道之源也。然則義父之道、情存無別、一家同財。豈有忘旧愛新之志哉。所以綴作数行之歌、令悔棄旧之惑。其詞曰

(略)

四一〇八 サトビトの見る目恥づかし左夫流児にさどはす君が宮出後風

この題詞と歌は、越中守大伴家持が、史生尾張少昨が遠方にいる妻を忘れ遊行女婦左夫流児に夢中になっていることに対して教諭するために作ったものである。家持の教諭は、律令条文と詔書を引用した教化の体裁をとったものだが、その目的は、「義夫之道、情存無別、一家同財。豈有忘旧愛新之志哉」という文に現れている。「義夫」は賦役令孝子条に推奨される儒教的規範の一つである。しかし、律令の「義夫」には夫婦の夫の意味はなく、それは「累代同居」「五代同居」等の一族の親和を顕彰する概念であった。家持はそれを別な意味で解釈し、夫婦が「情存無別、一家同財」の目的のために「愛旧」の志を持つべきことを推奨する。すなわち「天地の神ことよせて春花の盛りもあらむと待た

しけむ」(四一〇六)というように神の「ことよせ」(「言縁」)により夫婦の繁栄するまで共に待つことを誓った男女が、他女に関係をもつことで、「一家同財」の規範を破るべきではない、という「義夫の道」の独特な理解を施しているのである。そして、夫婦の協力―財の持ち寄りによる「一家」の形成―が、他女との婚姻により解体することを戒め、「一家同財」の規範を「サトビトの見る目」に仮託して少昨を諭したのが四一〇八の歌なのである。この場合、「サトビト」の人は、男女個人所有下での婚姻による財の移動を、「家」持続の観点から抑制しようとする規範としての意味になっている。

女性の婚姻を「サト」内にとどめようとする在地社会の指向は、未成熟な男女個人所有下の「家」が、個人の婚姻を契機とした「家」の経営資産の喪失を抑止するために女性の所有する財産を「家」が所属する「サト」内部にとどめようとした意図を示しているのではなからうか。その意味で、「サト」は流動的で移動性の強い男女個人を不安定な「家」の側につなぎとめ「家」の維持・発展を指向する、相互扶助的機能をもつ社会集団として認められるかもしれない。しかし、一方、人の移動・流動による財の移動・秩序形成が、「サト」―「家」の枠を超えて広く展開したこともまた事実である。固定的な家の結合体としての家父長的村

落とも移動性に特徴付けられている未開な双方的親族社会のいづれにも還元しがたい過渡的結合秩序、それが「サト」に関わる地域秩序の中に矛盾した形で現れていると思われるが、その特質の解明は今後の課題としたいと思う。

# 註

- (1) 山田英雄「律令制成立期の地方問題」、『古代の日本』九、一九七一年
- (2) 小林昌二「日本古代における「村」と村首・村長(上)(下)」、『新潟史学』第二二・二三号、一九八九年
- (3) 古橋信孝「風土記の『村』」、『古代文学』二六号、一九八七年
- (4) 関和彦「古里・在地社会論」(関和彦編『古代東国の民衆と社会』、一九九四年)
- (5) 拙稿「日本古代における在地社会の集団と秩序」、『歴史学研究』六七七、一九九五年
- (6) 池辺彌「和名類聚抄郡郷里駅名考証」(一九八一年)
- (7) 佐々木信綱『萬葉集辞典』(一九五六年)
- (8) 『万葉集』七二三番歌では、大伴坂上郎女が大伴氏の古い本拠地たる跡見庄を「古郷」と呼んでいる点が問題になる。しかし、跡見庄の所在地、桜井市外山はかつての王宮の地「磐余」の近在で、大王宮との関係で大伴氏が獲得した拠点とされる(土橋誠「宅地と本拠地に関する若干の憶説」『続日本紀の時代』一九九四年)
- (9) 浅野充「律令国家と宮都の成立」、『ヒストリア』一二二号、

史苑(第五八卷一号)

一九八九年)

- (10) 岸俊男「藤原仲麻呂の田村第」、『日本古代政治史研究』、一九六六年
- (11) 奈良国立文化財研究所「平城京左京四条二坊十五坪発掘調査報告」(一九八五年)
- (12) 注(15) 論文
- (13) 注(10) 論文、同「東大寺をめぐる政治的情勢」(注(10) 著書)
- (14) 『続日本紀』天平勝宝元年八月十日条
- (15) 和田萃「遷都以前」(『古代を考える 奈良』、一九八五年)。以下、和田氏の引用は同論文による。
- (16) 『日本書紀』推古十五年是歳条
- (17) 『角川日本地名大辞典・29奈良県』(一九九〇年)。
- (18) 『大日本古文書』二
- (19) 注(17) 編著
- (20) 『続日本紀』延暦九年十二月壬辰朔条
- (21) 注(11) 報告書は、仲麻呂が田村第を唐・玄宗の興慶宮になぞらえたという観点から、「田村里」の呼称を興慶宮の前身たる「隆慶里(坊)」と関連づけている。しかし、この解釈では、平城京に「田村里」以外の「里」が存在する必然性が理解できない。
- (22) 伊藤博「万葉集の構造と成立」(上)(一九七四年)
- (23) 中川幸広「万葉集卷十一十二試論」(『語文』二三、一九六五年)
- (24) 土橋寛「万葉開眼」(下)(一九七八年)
- (25) 遠藤宏「万葉集卷十三歌考」(『国語と国文学』五三一五、一九七六年)

古代の「サト」(田中)

- (26) 関口裕子『日本古代婚姻史の研究』(上)(下)(一九九三年)。  
関口氏は、「人言」の多義性から、それを村落的地域集団内部での婚姻の社会的統制とみる伊東すみ子(『奈良時代の婚姻についての一考察』(2)『国家学会雑誌』七三一、一九五九年)説を批判し、その制約を原始的思惟に関わるものとした。確かに「人言」自体に婚姻の共同体規制の意味はないと思われるが、私が問題にするのは、それが「サトビト」と結び付いた時に生じる社会的機能である。
- (27) 伊藤博『万葉集の歌人と作品』(上)(一九七五年)  
(28) 注(5) 拙稿参照。
- (29) 吉村武彦「日本古代における婚姻・集団・禁忌」(『奈良平安時代史論集』(上)、一九八四年)
- (30) 関口前掲(26) 著書。
- (31) 吉田晶『日本古代村落史序説』(一九八〇年)
- (32) 賦役令孝子条集解古記説。

(立教大学非常勤講師)

表1 『万葉集』の「サト」

史苑  
(第五八卷一号)

番号	語彙	表記	作歌者	区分	番号	語彙	表記	作歌者	区分
78	アスカノサト	明日香	元明か持統天皇	B	928	フリニシサト	古郷	笠金村	C
題詞	フルサト	能里			929	サト	里	笠金村	A
103	サト	古郷	天武天皇	C	948	サト	里	諸王諸臣子等	A
	オオハラノ	里		A	952	ナラノサト	檜乃里	車持千年	B
	フリニシサト	大原乃		D	969	フリニシサト	故郷	大伴旅人	C
		古尔之			題詞				
131	サト	郷	柿本人麻呂	A	986	サト	里	湯原王	A
138	サト	里	柿本人麻呂	A	992	ガンゴウジノ	元興寺	大伴坂上郎女	B
138	ツノノサト	角里		A	題詞	サト	之里		
207	サト	里	柿本人麻呂	B	992	フルサト	古郷	大伴坂上郎女	C
268	フリニシサト	故郷	長屋王	A	1026	サト	里	豊島采女	A
	フルヘノサト	古家乃		C	1028	トリ	都里		F
		里		C	題詞				
333	フリニシサト	故郷	大伴旅人	1028	サト	里	大伴坂上郎女	A	
334	フリニシサト	故去之	大伴旅人	C	1038	フルサト	故郷	高丘河内	C
		里		C	1039	サト	里	高丘河内	A
407	カスガノサト	春日里	大伴駿河	B	1047	ナラノフリニ	寧楽故	田辺福麻呂	D
451	フリニシサト	故郷	大伴旅人	C	シサト	郷			
題詞					1047	サト	里	田辺福麻呂	A
460	サトイエ	里家	大伴坂上郎女	A	1050	サト	里	田辺福麻呂	A
528	サカノウエノ	坂上里	大伴坂上郎女	B	1050	サト	郷	田辺福麻呂	A
左註	サト				1059	フリニシサト	故去之	田辺福麻呂	C
589	ウチミノサト	打廻乃	女性か	B		サト	里		A
		里			1125	フルサト	故郷		C
609	フルサト	故郷	笠女郎	C	題詞				
640	サト	里	湯原王	A	1125	サト	里		A
626	フルサト	古郷	八代女王	C	1205	サト	里		A
696	イズミノサト	泉之里	石川広成	B	1243	サトミ	里廻	男性	A
723	フルサト	古郷	大伴坂上郎女	C	1261	サトベ	里辺		A
725	カスガノサト	春日里	大伴坂上郎女	B	1434	カスガノサト	春日里		B
757	サト	里	大伴田村大嬢	A	1437	カスガノサト	春日里	大伴村上	B
左註	タムラノサト	田村里		B	1438	カスガノサト	春日里	大伴駿河麻呂	B
左註	サカノウエノ	坂上里		B	1473	サト	里	大伴旅人	A
	サト				1488	サト	里	大伴家持	A
775	フリニシサト	故郷	大伴家持	C	1506	フルサト	古郷	大伴田村大嬢	C
814	イチノサト	伊知郷		B	1515	サト	里	女性か	A
848	フルサト	故郷	山上憶良か大伴旅人	C	1557	フリニシサト	故郷		C
題詞					題詞				
853	サト	郷		A	1558	フリニシサト	古郷	沙弥尼等	C
題詞					1604	ナラノフルサ	寧楽故		D
859	サト	佐刀		A	題詞				
892	サトヲサ	五十戸	山上憶良	E	1740	サト	里		A
		良			1787	イソノカミフ	石上振	笠金村	B
					ルノサト	里			

番号	語彙	表記	作歌者	区分	番号	語彙	表記	作歌者	区分
1886	スミノエノサト	住吉里	男性	B	3571	サト	左刀	防人	A
1937	フルサト	故郷		C	3782	サト	佐刀	中臣宅守	A
	サトビト	里人		A	3783	サト	佐刀	中臣宅守	A
1971	フルサト	故郷		C	3851	ムカウノサト	無何有	虚無自然の理想	F
1978	サト	里	男性	A			乃郷	郷(莊子)	
2203	サト	里		A	3847	サトヲサ	五十戸	法師	E
2216	フルサト	古郷		C	3939	サト	佐刀	女性	A
2251	モリベノサト	守部乃		B	3957	サホノウチノ	佐保能	大伴家持	B
		五十戸					宇知乃		
2279	サト	郷	男性か	A			里		
2287	ナラノサトビト	平城里人		B	3973	サトビト	佐刀	大伴池主	A
2289	フジワラノフ	藤原古			3984	サト	佐刀	大伴家持	A
	リニシサト	郷		D	3988	サト	佐刀	大伴家持	A
2501	サト	里	女性か	A	4076	サト	佐刀	大伴家持	A
2541	ユキミノサト	往箕之	男性	B	4108	サトビト	左刀毗	大伴家持	A
		里					等		
2560	フリニシサト	古郷	女性か	C	4110	サト	佐刀	大伴家持	A
2562	サトビト	里人	男性	A	4130	サト	佐刀	大伴池主	A
2587	オオハラノフ	大原古		D	4132	イミヅノサト	射水之	大伴池主	B
	リニシサト	郷				題詞	郷		
2598	サトビト	里人	男性	A	4138	ヤブナミノサト	夜夫奈	大伴家持	B
2634	サト	里	女性か	A			美能佐		
2803	サト	里	男性	A			刀		
2873	サトビト	里人	不明	A	4180	サト	里	大伴家持	A
2876	サト	里	男性か	A	4209	サト	佐刀	久米広縄	A
3134	サト	里		A	4268	サト	里	内侍佐々木山君	A
3153	サト	里		A	4272	ヲサト	小里	大伴家持	F
3214	サト	里		A	4341	ミヲリノサト	美衰利之里	防人丈部足麻呂	B
3240	サト	里	穂積老	A	4457	クレノサト	伎人郷		B
3272	サトビト	里人	男性	A		題詞			
3302	サトビト	散度人	男性	A	4482	サト	佐刀		A
3303	サトビト	里人	女性	A	4491	スガハラノサト	須我波	石川女郎	B
3463	サト	佐刀	女性	A			良能佐		
3559	コソノサトビ	許曾能		B			刀		
		左刀毗							
		等							

古代の「サト」(田中)

※番号は、歌番号、A～Fは、2頁の語彙区分による。